

持続する〈ナクバ〉について

——企画展示とブックトークの記録

小 森 謙一郎

2023年10月23日から12月20日まで、大学図書館本館1Fにて企画展示「ナクバからホロコーストへ——21世紀における人文知の地平」を開催した。期間中の11月9日には、ブックトーク「『ホロコーストとナクバ』刊行に寄せて」も実施した。どちらも2月刊行の訳書バシール・バシール／アモス・ゴールドバーグ編『ホロコーストとナクバ——歴史とトラウマについての新たな話法』（水声社、2023年）を軸とした企画である。

企画展示とブックトークは訳書刊行後の2022年度末から温めていたもので、2023年度の初頭から図書館職員の方々と段階的に準備を進めていた。そのため10月7日にはおよそ準備も完了していたが、この日を境にパレスチナ／イスラエル情勢そのものが大きく変動した。本稿の執筆時点でも予断を許さない状況が続いている。

結果的に、準備していた展示用資料やブックトークの内容にも若干手を入れたが、現状に鑑みてこれらの全体を記録として残すことには一定の意義があると考えられ、また実際にそうした声も人文学部の複数の先生方からいただいたため、この場を借りてそのままの形で提示することとした。

ご協力いただいた図書館職員の方々に感謝申し上げますとともに、いつか——願わくばそう遠くはない将来に——この小さな記録を「かつての遅れた時代の出来事」として振り返ることのできる日が訪れることを願っている。

Ⅰ 企画展示「ナクバからホロコーストへ—— 21世紀における人文 知の地平」

まず上記記書の紹介からはじめ、残りの全体を4つのセクションに分ける構成とした。それぞれのセクションには配備した本とそのセクションに関する説明を載せたパネルを設置し、同内容の紙資料を自由に持ち帰れるようにした。以下がその内容である。

0. 『ホロコーストとナクバ』

- ・バシール・バシール+アモス・ゴールドバーグ編『ホロコーストとナクバ——歴史とトラウマについての新たな話法』小森謙一郎訳、水声社、二〇二三年
- ・*The Holocaust and the Nakba : a New Grammar of Trauma and History*, edited by Bashir Bashir and Amos Goldberg, Columbia University Press, 2019

「ナクバ」という言葉は、比較的新しい言葉です。欧米で用いられるようになったのもここ30年くらいのことで、今日なお一般的によく知られているとは言えません。しかし「知らない」ということが、たちどころに「悪」につながるような出来事が存在するのも事実です。しかもそれが人類史上最大の犯罪とも言われる「ホロコースト」に直結する出来事だとしたら、どのように思われるでしょうか？

本書は今回の企画の中心に位置する本であり、「ホロコースト」と「ナクバ」が一つの連続した出来事であることを示しています。今回の企画で展示してある本は、すべて本書に何らかの形で関わっています。全部で4つのセクションに分かれています。順に説明を読んでいただければ、「ナクバ」とは何か、それはどのようにして「ホロコースト」とつながっているのか、輪郭がつかめるのではないかと思います。

本書を含め、気になった本はひとまず手に取ってみて下さい。本書以外は貸出も可能です。

1. ナクバとは何か？

① オリエンタリズムからパレスチナ問題へ

- ・エドワード・W・サイド『オリエンタリズム』（上下）板垣雄三・杉田英明
監修、今沢紀子訳、平凡社ライブラリー、一九九三年
- ・エドワード・W・サイド『パレスチナ問題』杉田英明訳、みすず書房、
二〇〇四年
- ・エドワード・W・サイド『イスラム報道——ニュースはいかにつくられるか』
浅井信雄・佐藤成文・岡真理訳、みすず書房、増補版、二〇一八年
- ・エドワード・W・サイド『パレスチナとは何か』島弘之訳、岩波現代文庫、
二〇〇五年
- ・エドワード・W・サイド『音楽のエラボレーション』大橋洋一訳、みすず書房、
二〇〇四年
- ・エドワード・W・サイド『文化と帝国主義』（全二冊）大橋洋一訳、みすず
書房、一九九八-二〇〇一年
- ・エドワード・W・サイド／D・バーサミアン『ペンと剣』中野真紀子訳、ち
くま学芸文庫、二〇〇五年
- ・エドワード・W・サイド『収奪のポリティックス——アラブ・パレスチナ論
集成 1969-1994』川田潤・伊藤正範・齋藤一・鈴木亮太郎・竹森徹士訳、
NTT 出版、二〇〇八年
- ・エドワード・W・サイド『遠い場所の記憶——自伝』中野真紀子訳、みすず
書房、二〇〇一年
- ・エドワード・W・サイド『故国喪失についての省察』（全二巻）大橋洋一・近
藤弘幸・和田唯・三原芳秋・近藤弘幸・和田唯・大貫隆史・貞廣真紀訳、み
すず書房、二〇〇六-二〇〇九年
- ・エドワード・W・サイド『権力、政治、文化——エドワード・W・サイド
発言集成』（上下）大橋洋一・三浦玲一・坂野由紀子・河野真太郎・田村理香・
横田保恵訳、太田出版、二〇〇七年
- ・バレンボイム／サイド『音楽と社会』アラ・グゼリミアン編、中野真紀子訳、

みすず書房、二〇〇四年

- ・エドワード・W・サイド『フロイトと非-ヨーロッパ人』長原豊訳、平凡社、二〇〇三年
- ・エドワード・W・サイド／D・バーサミアン『文化と抵抗』大橋洋一・大貫隆史・河野真太郎訳、ちくま学芸文、二〇〇八年
- ・エドワード・W・サイド『人文学と批評の使命——デモクラシーのために』村山敏勝・三宅敦子訳、二〇一三年
- ・エドワード・W・サイド『オスロからイラクへ——戦争とプロパガンダ 2000-2003』中野真紀子訳、みすず書房、二〇〇五年
- ・エドワード・W・サイド『晩年のスタイル』大橋洋一訳、岩波書店、二〇〇七年

まず、「ナクバ」とは何かを考えるにあたって、エドワード・W・サイドという人物を抜きにして語ることはできません。元来、サイドは英文学者であり、最初の著書『オリエンタリズム』は非常に有名です。しかし、パレスチナ出身のサイドは、すぐさま自分の故郷のことについて語るようになります。1948年5月、パレスチナにはイスラエルという国が建設され、そこに住んでいた多くの人々が追放されたのでした。「パレスチナ問題」の始まりです。

サイドのどの本にも、この「問題」との格闘の跡が残されています。サイドが亡くなってから今年でちょうど20年ですが、その著作は今日ますます重要度を増しています。音楽についての評論にさえ、アクチュアリティが宿っています（対位法についての考察がとくに重要です）。

② 新たな歴史家たち

- ・Benny Morris, *The Birth of the Palestinian Refugee Problem Revisited*, Cambridge University Press, 2004
- ・Benny Morris, *1948 and After : Israel and the Palestinians*, Clarendon Press, 1994

持続する〈ナクバ〉について——企画展示とブックトークの記録 小森 謙一郎

- ・イラン・パペ（語り）／ミーダーン「パレスチナ・対話のための広場」編訳『イラン・パペ、パレスチナを語る——「民族浄化」から「橋渡しのナラティブ」へ』、柘植書房新社、二〇〇八年
- ・イラン・パペ『パレスチナの民族浄化——イスラエル建国の暴力』田浪亜央江・早尾貴紀訳、法政大学出版局、二〇一七年
- ・イラン・パペ『イスラエルに関する十の神話』脇浜義明訳、法政大学出版局、二〇一八年
- ・アヴィ・シュライム『鉄の壁——イスラエルとアラブ世界』（上下）神尾賢二訳、緑風出版、二〇一三年
- ・トム・セゲフ『エルヴィス・イン・エルサレム——ポスト・シオニズムとイスラエルのアメリカ化』、柘植書房新社、二〇〇四年
- ・トム・セゲフ『七番目の百万人——イスラエル人とホロコースト』脇浜義明訳、ミネルヴァ書房、二〇一三年

もっとも、イスラエル国内では、建国時の資料は長らく封印されていました。パレスチナ人という民族自体も公式には認められておらず、「問題」などなかったかのようでした。しかし、1990年代になって公文書の閲覧が可能になると、イスラエル建国時に先住民を排除する組織的な計画があったことが明らかになりました。

このような民族浄化の政策はその後のイスラエルにどう関わっているのか——この点を追求したのが「新たな歴史家たち」です。具体的には、ベニー・モリス、イラン・パペ、トム・セゲフ、アヴィ・シュライムの4人です。ベニー・モリスのみ日本語訳がありませんが、実証的なレベルで「問題」が本格的に追求されはじめたのは、ようやくここ30年のことなのです。

そして「ナクバ」という言葉がパレスチナ人の被っている「災厄」全体を示す言葉として人口に膾炙しはじめたのも、ちょうどこの頃からでした。

付記：2023年10月7日、イスラエルはガザ地区からの攻撃を受けて戦争状態

を宣言、「鉄の剣作戦」と題した軍事作戦を開始しました。過去にない規模になることが危惧されています。「戦争」や「紛争」といっても、圧倒的な軍事力・経済力を背景に国際法違反の占領を続けてきたイスラエルは、最初からパレスチナ側と対等な関係にはありません。にもかかわらず、日本を含むいわゆる西側諸国がハマースによる攻撃だけを非難するのは何故なのか、また主要な国々がイスラエルを支持するのは本当に適切な道義的姿勢と言えるのか、今回の企画を通じて考えていただけたらと思います。

2. シオニズムとイスラエル／パレスチナ論

① シオニズムについて

- ・テオドール・ヘルツル『ユダヤ人国家——ユダヤ人問題の現代的解決の試み』佐藤康彦訳、法政大学出版局、新装版、二〇一一年
- ・ウォルター・ラカー『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』高坂誠訳、第三書館、一九八七年
- ・森まり子『社会主義シオニズムとアラブ問題——ベングリオン軌跡 1905～1939』、岩波書店、二〇〇二年
- ・森まり子『シオニズムとアラブ——ジャボティンスキーとイスラエル右派 一八八〇—二〇〇五年』、講談社選書メチエ、二〇〇八年
- ・赤尾光春・早尾貴紀編『シオニズムの解剖——現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』人文書院、二〇一一年
- ・鶴見太郎『ロシア・シオニズムの想像力——ユダヤ人・帝国・パレスチナ』、東京大学出版会、二〇一二年
- ・長沢栄治『アラブ革命の遺産——エジプトのユダヤ系マルクス主義者とシオニズム』、平凡社、二〇一二年
- ・池田有日子『ユダヤ人問題からパレスチナ問題へ——アメリカ・シオニスト運動にみるネーションの相克と暴力連鎖の構造』、法政大学出版局、二〇一七年
- ・ジュディス・バトラー『分かれ道——ユダヤ性とシオニズム批判』大橋洋一・岸まどか訳、青土社、二〇一九年

それにしても、ユダヤ人たちはなぜイスラエルという国家を建設する必要があったのでしょうか？ ヨーロッパ内では自分たちの国家を持ってなかったからです。

ヨーロッパの国々では、どこであってもユダヤ人は少数派の異民族であり、とくに第一次世界大戦後に民族国家の枠組みがスタンダードになると、ますます身の置き場を失うことになりました。そのため、ユダヤ人たちのあいだでは、自分たちの国家を持つというシオニズムの運動が熱を帯びることになります。この運動は果たしてどのような経過を辿ることになるのか、順を追って考えてみると「ホロコースト」と「ナクバ」のつながりが見えてきます。

ユダヤ人はヨーロッパに居場所を作れなかった——それどころか絶滅寸前まで追い詰められた——からこそパレスチナに居場所を求めたわけですが、今度はそこに住んでいた人々の居場所を奪うことになったのです。1948年から今日なお続いている現在進行形の災厄、それが「ナクバ」です。

従来「パレスチナ問題」という括りで捉えられていた「問題」は、シオニズムによる暴力の「問題」であり、それはパレスチナ人にとって「災厄」にほかなりません。そしてシオニズムによる暴力は、「ホロコースト」があったからこそ本格的な仕方パレスチナの地にもたらされたのです。

② イスラエル／パレスチナ論

- ・ 四方田彦彦『パレスチナ・ナウ——「戦争／映画／人間』、作品社、二〇〇六年
- ・ 田浪垂央江『「不在者」たちのイスラエル——占領文化とパレスチナ』、インパクト出版会、二〇〇八年
- ・ サラ・ロイ『ホロコーストからガザへ——パレスチナの政治経済学』岡真理・小田切拓・早尾貴紀編訳、青土社、二〇〇九年
- ・ 菅瀬晶子『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』 溪水社、二〇〇九年
- ・ ミーダーン「パレスチナ・対話のための広場」編『「鏡」としてのパレスチナ——ナクバから同時代を問う』、現代企画室、二〇一〇年

- ・ 錦田愛子『ディアスポラのパレスチナ人——「故郷(ワタン)」とナショナル・アイデンティティ』、有信堂高文社、二〇一〇年
- ・ 白杵陽『世界史の中のパレスチナ問題』、講談社現代新書、二〇一三年
- ・ 江崎智絵『イスラエル・パレスチナ和平交渉の政治過程——オスロ・プロセスの展開と挫折』、ミネルヴァ書房、二〇一三年
- ・ 鴨志田聡子『現代イスラエルにおけるイディッシュ語個人出版と言語学習活動』、三元社、二〇一四年
- ・ 立山良司『ユダヤとアメリカ——揺れ動くイスラエル・ロビー』中公新書、二〇一六年
- ・ ベン・ホワイ特『イスラエル内パレスチナ人——隔離・差別・民主主義』脇浜義明訳、法政大学出版局、二〇一八年
- ・ 川上泰徳『シャティールラの記憶——パレスチナ難民キャンプの70年』岩波書店、二〇一九年
- ・ 早尾貴紀『パレスチナ／イスラエル論』有志舎、二〇二〇年
- ・ 山本健介『聖地の紛争とエルサレム問題の諸相——イスラエルの占領・併合政策とパレスチナ人』晃洋書房、二〇二〇年
- ・ 森まり子『イスラエル政治研究序説——建国期の閣議議事録一九四八年』、人文書院、二〇二〇年
- ・ 鈴木啓之『蜂起「インティファダ」——占領下のパレスチナ1967-1993』、東京大学出版会、二〇二〇年
- ・ 森戸幸次『パレスチナ人とイスラエル——中東百年紛争の「解」を求めて』第三書館、二〇二〇年
- ・ 浜中新吾編著『イスラエル・パレスチナ』、ミネルヴァ書房、二〇二〇年
- ・ 今野泰三『ナショナリズムの空間——イスラエルにおける死者の記念と表象』、春風社、二〇二一年
- ・ シルヴァン・シペル『イスラエル vs. ユダヤ人——中東版「アパルトヘイト」とハイテク軍事産業』林昌宏訳、明石書店、二〇二二年
- ・ 在日本韓国 YMCA 編『交差するパレスチナ——新たな連帯のために』、新教

出版社、二〇二三年

このパートでは、イスラエル／パレスチナ情勢について書かれた研究書・訳書を集めてみました。ここ数年のあいだに、刊行数が急激に増えているのが分かるのではないかと思います。この事実は、「問題」に関心を持つ人々が増えていることを示すとともに、「問題」そのものが激化・悪化していることを示しています。実際、パレスチナ人に対するイスラエル国家の暴力は、いわば日に日にギアを上げるような状況が続いています。

とはいえ、それは「ホロコースト」という災厄の延長にあることも事実で、だとすると「問題」全体を「ホロコーストとナクバ」という観点から捉え直す必要があることになるでしょう。

3. 現代アラビア文学・パレスチナ文学

- ・野間宏編『現代アラブ文学選』、創樹社、一九七四年
- ・ガッサーン・カナファーニー『ハイファに戻って／太陽の男たち』黒田寿郎・奴田原睦明訳、河出文庫、二〇一七年
- ・エミール・ハビービー『悲楽観屋サイドの失踪にまつわる奇妙な出来事』山本薫訳、作品社、二〇〇六年
- ・マフムード・ダルウィーシュ『壁に描く』四方田犬彦訳、書肆山田、二〇〇六年
- ・ネオミ・シーハブ・ナイ『ハビービー——私のパレスチナ』小泉純一訳、北星堂書店、二〇〇八年
- ・小泉純一『アメリカに響くパレスチナの声——サイド、ダルウィーシュから、ネオミ・シーハブ・ナイへ』、水声社、二〇一一年
- ・岡真理『棗椰子の木陰で——第三世界フェミニズムと文学の力』、青土社、新装版、二〇二二年
- ・岡真理『アラブ、祈りとしての文学』、みすず書房、新装版、二〇一五年
- ・岡真理『ガザに地下鉄が走る日』、みすず書房、二〇一八年
- ・ジャン・ジュネ『シャティエラの四時間』鶴飼哲・梅木達郎訳、インスクリプ

ト、二〇一〇年

- ・ジャン・ジュネ『公然たる敵』アルベール・ディシィ編、鶴飼哲・梅木達郎・根岸徹郎・岑村傑訳、月曜社、二〇一一年
- ・ジャン・ジュネ『恋する虜——パレスチナへの旅』鶴飼哲・海老坂武訳、人文書院、一九九四年
- ・Elias Khoury, *Gate of the Sun*, translated from the Arabic by Humphrey Davies, Vintage, 2006
- ・Elias Khoury, *The Children of the Ghetto: My Name is Adam*, translated from the Arabic by Humphrey Davies, Archipelago, 2019

文学の役割とは何でしょうか？ 最初に紹介したエドワード・サイドが英文学者だったことは述べました。歴史家たちが「問題」に取り組みはじめたのはその後のことです。歴史家にとって不可欠な史料が整うには時間がかかるからです。その意味で、一番最初に「問題」に取り組んだのがもっぱら自分の言葉だけを頼りとする作家や詩人たちだったのは、必然的だったと言えるかもしれません。

ガッサーン・カナファーニーの小説やマフムード・ダルウィーシュの詩は、「ナクバ」の実相を非常によく捉えています。フランス人のジャン・ジュネがシャティエラの虐殺に居合わせたことも偶然ではありません。エリヤース・フーリーをはじめ、現代アラビア文学にはまだまだ知られていない作家や詩人がたくさんいます。岡真理氏の貴重な評論から、その一端を窺い知ることができるでしょう。

4. ホロコーストの記憶

① 生存者たちの証言

- ・ヴィクトール・E・フランクル『夜と霧』池田香代子訳、みすず書房、新版、二〇〇二年
- ・ブリーモ・レーヴィ『溺れるものと救われるもの』竹山博英訳、朝日新聞出版、二〇一九年
- ・ブリーモ・レーヴィ『これが人間か——アウシュヴィッツは終わらない』竹山

持続する〈ナクバ〉について——企画展示とブックトークの記録 小森 謙一郎

博英訳、改訂完全版、朝日新聞出版、二〇一七年

- ・プリーモ・レーヴィ『休戦』竹山博英訳、岩波文庫、二〇一〇年
- ・プリーモ・レーヴィ『プリーモ・レーヴィは語る——言葉・記憶・希望』マルコ・ベルポリーティ編、多木陽介訳、青土社、二〇〇二年（オリジナル編集）
- ・ジャン・アメリー『罪と罰の彼岸——打ち負かされた者の克服の試み』池内紀訳、みすず書房、新版、二〇一六年
- ・シャルロット・デルポー『誰も戻らない』亀井佑佳訳、月曜社、二〇二二年
- ・ジョルジョ・アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの——アルシーヴと証人』上村忠男・廣石正和訳、月曜社、二〇〇一年
- ・柿本昭人『アウシュヴィッツの「回教徒」——現代社会とナチズムの反復』、春秋社、二〇〇五年

「ナクバ」という言葉は知らなくても「ホロコースト」という言葉なら聞いたことはある、という人は多いのではないかと思います。なぜそういう人が多いのかには歴史的な理由があります。とはいえ、まずは「ホロコースト」を本当に知っているのかどうか、確認してみることも必要でしょう。ここではとくにアウシュヴィッツ収容所から生還した人々の証言と、それについて考察した本を集めています。ただし、ホロコーストはもっぱらアウシュヴィッツで進化したわけではなく、ガス室だけが虐殺の現場だったわけではない、という事実も重要です（さらに言えば、ユダヤ人たちだけが犠牲者だったわけでもありません）。

② ホロコーストは唯一無二か？

- ・ハンナ・アーレント『全体主義の起原1 ——反ユダヤ主義』大久保和郎訳、『全体主義の起原2 ——帝国主義』大島通義・大島かおり訳、『全体主義の起原3 ——全体主義』大久保和郎・大島かおり訳、みすず書房、新版、二〇一七年
- ・ハンナ・アーレント『エルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告』大久保和郎訳、みすず書房、新版、二〇一七年
- ・J・ハーバーマス / E・ノルテほか『過ぎ去ろうとしない過去——ナチズムと

- ドイツ歴史家論争』徳永恂・清水多吉・三島憲一・小野島康雄・辰巳伸知・細見和之訳、人文書院、一九九五年
- ・クロード・ランズマン『ショアー』高橋武智訳、作品社、一九九五年
 - ・ショシャナ・フェルマン『声の回帰——映画『ショアー』と「証言」の時代』上野成利・崎山政毅・細見和之訳、太田出版、一九九五年
 - ・ソール・フリードランダー編『アウシュヴィッツと表象の限界』上村忠男・小沢弘明・岩崎稔訳、未来社、一九九四年
 - ・ロニー・ブローマン／エイアル・シヴァン『不服従を讀んで——「スペシャリスト」アイヒマンと現代』高橋哲哉・堀潤之訳、産業図書、二〇〇〇年
 - ・ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『イメージ、それでもなお——アウシュヴィッツからもぎ取られた四枚の写真』橋本一径訳、平凡社、二〇〇六年
 - ・ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『場所、それでもなお』江澤健一郎訳、月曜社、二〇二三年
 - ・ノーマン・G・フィンケルスタイン『ホロコースト産業——同胞の苦しみを「売り物」にするユダヤ人エリートたち』立木勝訳、三交社、二〇〇四年
 - ・ノーマン・G・フィンケルスタイン『イスラエル擁護論批判——反ユダヤ主義の悪用と歴史の冒瀆』立木勝訳、三交社、二〇〇七年

1980年代にホロコーストは人類史上並び立つものない犯罪、空前絶後の絶対悪として認識されるようになりました。あらゆる比較を絶しているのだから、ホロコーストとほかの出来事を並べて論じたりすべきではない、と考えられるようになったのです。クロード・ランズマンの映画『ショアー』は9時間に及ぶ大作ですが、他方でこうした考え方を助長しました。同時に、イスラエルはそうしたホロコーストの被害者となったユダヤ人のための国なのだから、イスラエルの存続は必要不可欠であり、イスラエルを批判することは要するに反ユダヤ主義なのだ、という論法がアメリカを中心に広まるようになります。1993年のオスロ合意は、このような傾向に拍車をかけるものでした。とはいえ、こうした流れのなかでは重大な「問題」が忘れ去られていないでしょうか？

③ 最近の諸研究

- ・ 武井彩佳『ユダヤ人財産はだれのものか——ホロコーストからパレスチナ問題へ』、白水社、二〇〇八年
- ・ ジョン・トーピー『歴史的賠償と「記憶」の解剖——ホロコースト・日系人強制収容・奴隷制・アパルトヘイト』藤川隆男・酒井一臣・津田博司訳、法政大学出版局、二〇一三年
- ・ ジェフリー・ハーフ『ナチのプロパガンダとアラブ世界』星乃治彦・白杵陽・熊野直樹・北村厚・今井宏昌訳、岩波書店、二〇一三年
- ・ ティモシー・スナイダー『ブラッドランド——ヒトラーとスターリン大虐殺の真実』（上下）布施由紀子訳、筑摩書房、二〇一五年
- ・ 白井隆一郎『アウシュヴィッツのコーヒー——コーヒーが映す総力戦の世界』石風社、二〇一六年
- ・ エンツォ・トラヴェルソ『ヨーロッパの内戦——炎と血の時代 一九一四—一九四五年』宇京頼三訳、未来社、二〇一八年
- ・ 細見和之『「投壘通信」の詩人たち——「詩の危機」からホロコーストへ』、岩波書店、二〇一八年
- ・ アライダ・アスマン『想起の文化——忘却から対話へ』安川晴基訳、岩波書店、二〇一九年
- ・ 菅野賢治『「命のヴィザ」言説の虚構——リトアニアのユダヤ難民に何があったのか?』、共和国、二〇二一年
- ・ 加藤有子編『ホロコーストとヒロシマ——ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶』、みすず書房、二〇二一年
- ・ 西成彦『死者は生者のなかに——ホロコーストの考古学』、みすず書房、二〇二二年

オスロ合意から30年後の今日、ようやくホロコーストを唯一絶対視する見方が変わってきたように思われます。この間に刊行された研究書には、その萌芽が認められます。「ホロコーストとナクバ」という見地から、これらの本を読み直

してみると新たな認識が得られることでしょう。ユダヤ人とアラブ人にまつわる「問題」は、実際には一つなのです。

II ブックトーク「『ホロコーストとナクバ』刊行に寄せて」

2023年11月9日は、「水晶の夜」から85年目、ベルリンの壁崩壊から34年目となる日だった。ホロコーストの本格化と現在に至る「国際社会」の誕生を告げるのと同じ日に、今回のような「トーク」をするに至った事実は、第二次世界大戦を経てなおひとつの時代が終わっていないことを示しているのかもしれない。金髪の野獣の精神が、一方のセム人に乗り移り、他方のセム人を叩く——新しいのはこの憑依だけで、精神の狂信性そのものは一千年以上前から変わっていない。同じ精神の政治経済学に規定された大学組織——「アントレプレナーシップ」や「リーダーシップ」がその標語である——において、いかにして「ユダヤ＝キリスト教文明」の陥穽を突くことができるのか？ それが「トーク」のもうひとつの課題だった。

全容は以下のURLで聴くことができる（音質については技術上の理由からご容赦願いたい）。配布したレジユメの内容も付記しておく。

・ブックトーク全容：

<https://app.box.com/s/0zo4vemlv84s4so72xb55dacuqun13ct>

・配布レジユメ内容：

0. 島は海に浮かんでいるのか？

1. 歴史を遡る

① ハマース

1993 オスロ合意：→「2 国家解決案」

イスラエルは PLO をパレスチナの代表と認め、
PLO はイスラエルの存在を認める。>平等か？

② イスラエル

1948 イスラエル建国：

先住民 70～80 万人を追放、10 数万人が国内難民に＝ナクバ（災厄）

人口比の問題 >ユダヤ人の多数派を維持したいシオニスト

ホロコースト生存者の行き先としてのイスラエル：ユダヤ人問題の輸出＝パレスチナ問題へ

③ シオニズム

1894 ドレフュス事件：

仏陸軍大尉アルフレド・ドレフュス逮捕（スパイ容疑、濡れ衣）

テーオドル・ヘルツル『ユダヤ人国家』（1896 年）> 1897 シオニスト会議

④ 反セム主義、反ユダヤ主義

1879 反ユダヤ協会 Antijüdischer Verein →反セム同盟 Antisemitenliga

ヴィルヘルム・マル+ヘクトール・ド・グルジリエ

「ユダヤ人」→「セム人」（＝ユダヤ人、アラブ人）

1935 宣伝省：報道機関に「反セム」でなく「反ユダヤ」とするよう指示

1942 宣伝省室：「反セム活動 Antisemitische Aktion」から「反ユダヤ活動 Antijüdische Aktion」へ

ゲッベルスも同様の報道機関に同様の要請

1944 NSDAP 人種政治局長ヴァルター・グロース：

ユダヤ人は中東の諸民から「厳密に区別される」のでなければならない
（ラシード・アーリー・アル＝ガイラーニー宛の公開書簡）

戦後、アドルフ・アイヒマン：

「反セム主義」という言葉は「正しくない」、「反ユダヤ主義」とすべき

(参考)

<https://ccp-ngo.jp/palestine/>

特定非営利活動法人（認定NPO）パレスチナ子どものキャンペーン（CCP Japan）

パレスチナは、東をヨルダンに接する「ヨルダン川西岸地区」と、西を地中海、南をエジプトに接する「ガザ地区」に分かれています。ヨルダン川西岸とガザは1994年以來「パレスチナ自治区」とされ、「パレスチナ自治政府」が存在していますが、独立国家ではありません（国連のオブザーバー資格を持っています）。

人口は両地域を合わせて約455万人で、その過半数が15歳以下の子どもです。面積はヨルダン川西岸地区が5,655平方km（三重県と同程度）、ガザ地区が365平方km（福島市と同程度）です。

面積は第二次世界大戦終結以前のものから、国連の分割決議案、中東戦争を経て大幅に縮小しました。現在も、ヨルダン川西岸地区ではイスラエルの入植活動により、ガザでは占領政策等によって実質的な面積が縮小し続けています。

（下線は引用者）

2. ホロコーストは唯一無二か？

① 歴史家論争（1986）

ホロコーストは過去のものか？

歴史家エルンスト・ノルテら vs 哲学者ユルゲン・ハーバーマス

>ハイデガー論争、ポール・ド・マン論争などへ波及

② クロード・ランズマン『シヨアー』（1985）

ホロコーストは「供犠、生贄」に結びついたヘブライ語

だが、実際にあったのは「殲滅、絶滅」（シヨアー）である

持続する〈ナクバ〉について——企画展示とブックトークの記録 小森 謙一郎

>しかしこの映画の前ではジュネ『シャティエラの四時間』（1983）は色褪せるのか？

③ ホロコーストの記憶

- ・ホロコースト記念博物館（ワシントン、1993）
- ・ユダヤ博物館（ベルリン、2001）
- ・ショアー記念館（パリ、2005）
- ・ポーランドユダヤ人歴史博物館（ワルシャワ、2013） etc

cf. アライダ・アスマン『想起の文化——忘却から対話へ』（2019年）

原著は『想起の文化における新たな居心地悪さ——ひとつの介入』（2013年）

④ 日本では…

杉原千畝：戦時中「命のヴィザ」を発給したとされる

1985「諸国民の中の正義の人」に認定（イスラエル、ヤド・ヴァシェム）

だが杉原のヴィザは「ナチスに追われた」ユダヤ人に発行されたのではない

cf. 菅野賢治『「命のヴィザ」言説の虚構』（2021年）

『「命のヴィザ」の考古学』（2023年）

しかし

⑤ 国連総会決議 60/7

「2005年11月1日、国連総会は、ユダヤ人の3分の1、そして無数のマイノリティーの人々が殺害されたホロコーストを再確認し、憎悪、敵対感情、人種差別、偏見がもつ危険性を永遠に人々に警告することを目的に、総会決議 60/7 を採択しました」。

https://www.unic.or.jp/news_press/info/11945/

https://www.unic.or.jp/files/a_res_60_7.pdf

>ホロコーストにおいて、ユダヤ人だけが殺害されたわけではない

3. antisemitism とは何か？

① IHRA (International Holocaust Remembrance Alliance)

<https://www.holocaustremembrance.com/>

A world that remembers the Holocaust.

A world without genocide.

② IHRA による antisemitism の定義 (2016)

<https://www.holocaustremembrance.com/resources/working-definitions-charters/working-definition-antisemitism>

- Calling for, aiding, or justifying the killing or harming of Jews in the name of a radical ideology or an extremist view of religion.
- Making mendacious, dehumanizing, demonizing, or stereotypical allegations about Jews as such or the power of Jews as collective — such as, especially but not exclusively, the myth about a world Jewish conspiracy or of Jews controlling the media, economy, government or other societal institutions.
- Accusing Jews as a people of being responsible for real or imagined wrongdoing committed by a single Jewish person or group, or even for acts committed by non-Jews.
- Denying the fact, scope, mechanisms (e.g. gas chambers) or intentionality of the genocide of the Jewish people at the hands of National Socialist Germany and its supporters and accomplices during World War II (the Holocaust).
- Accusing the Jews as a people, or Israel as a state, of inventing or exaggerating the Holocaust.
- Accusing Jewish citizens of being more loyal to Israel, or to the alleged priorities of Jews worldwide, than to the interests of their own nations.
- Denying the Jewish people their right to self-determination, e.g., by

claiming that the existence of a State of Israel is a racist endeavor.

- Applying double standards by requiring of it a behavior not expected or demanded of any other democratic nation.
- Using the symbols and images associated with classic antisemitism (e.g., claims of Jews killing Jesus or blood libel) to characterize Israel or Israelis.
- Drawing comparisons of contemporary Israeli policy to that of the Nazis.
- Holding Jews collectively responsible for actions of the state of Israel.

Antisemitic discrimination is the denial to Jews of opportunities or services available to others and is illegal in many countries.

> 「他の人々が利用できる機会やサービスを否定すること」は差別だが、対象は Jews だけか？

> 「現代のイスラエルの政策をナチスの政策と比較すること」は人種差別か？

> 欧米諸国のほとんどを含む 43 国が加盟 (> 「ユダヤ=キリスト教文明」)

<https://www.holocaustremembrance.com/resources/working-definitions-charters/working-definition-antisemitism/adoption-endorsement>

(追記)

以上のブックトークを発展させた内容を、「反セム主義、反ユダヤ主義——ひとつの提言」と題して、2023 年 11 月 29 日に開催されたイスラーム信頼学緊急セミナー 2 「2023 年パレスチナ／イスラエルのカタストロフ〈ナクバ〉の地球的意味を考える——ガザ、ホロコースト、アパルトヘイト」(東京外国語大学 AA 研) で発表した。国連分割決議から 76 年目を数える日に、こうしたセミナーが開催されたことはきわめて意義深いと言えるだろう。

